〔その他〕

専門看護師教育課程修了後のがん看護専門看護師育成に向けた支援活動

赤木郁子　糸川紅子　打矢和子　小川雅子
川原明子　新田純子　下平唯子

Support activities for the development of certified nurse specialists in cancer nursing after completing professional nursing education program

Ikuko AKAGI[1)], Beniko ITOKAWA[1)], Kazuko UCHIYA[2)], Masako OGAWA[3)]
Akiko KAWAHARA[4)], Junko NITTA[1)], Yuiko SHIMODAIRA[5)]

要旨：
本活動の目的は、専門看護師教育課程修了後のがん看護専門看護師候補生及び新人がん看護専門看護師（以下、修了生）に対し、がん看護専門看護師としての役割遂行に必要な能力向上のための支援をすることである。
本活動は2018年度より開始となり、2020年度からは日本赤十字秋田看護大学大学院（以下、本学）の学長裁量教育・事業活動促進助成を受け、「はばたけ秋田のCNS」として現在も活動を継続している。その主な活動内容は事例検討会や研究活動、社会貢献への支援である。事例検討会においては、修了生が専門看護師として関わった困難事例に対して、修了生及び本学高度実践看護学（がん看護）教育課程の教員間で討議を行い、事例の分析や専門看護師としての思考過程の整理を行った。また研究支援では、修了生が共同で取り組んでいる研究のデータ分析に対して支援を行った。加えて、本学における授業の非常勤講師やがん看護学実習での臨床指導を依頼し、後進の育成を通して社会貢献ができるよう支援を行った。
修了生からは、本活動ががん看護専門看護師の役割遂行に必要な能力向上につながったとの報告が寄せられており、本活動の目的にかなった成果が得られたと考える。本活動は、臨床の場で修了生ががん看護専門看護師としての役割開発をしていく上で、重要な役割を果たしていると考えられ、今後も継続していくことが求められている。

キーワード：がん看護専門看護師、事例検討会、研究支援、社会貢献

Abstract:
This activity aimed to support candidates and newly certified nurse specialists in cancer nursing (hereinafter referred to as “graduates”) who have completed the professional nursing education program for improving the necessary skills to perform effectively as professional nurses.
This activity started in the financial year 2018, and from the financial year 2020, it has been funded by the Japanese Red Cross Akita College of Nursing Graduate School (hereinafter referred to as “the College”) through the President’s Discretionary Grant for the Promotion of Education and Project Activities, and continues as “Habatake Akita no CNS.” The primary activities of the program are supporting case study meetings, research activities and social contributions. At the case study meetings, the graduates and faculty of the Advanced Practice Nursing (Cancer Nursing) Education Program discussed difficult cases that the graduates were involved in as professional nurses, analyzed the cases, and organized their thought processes as professional nurses. Concerning research support, we provided support for the data analysis of the research. Furthermore, we requested part-time lecturers for classes in our program and clinical instructors for oncology nursing practice, and provided support so that they can contribute to society through the development of future generations.
Students who have completed the program have commented that this activity has led to the improvement of their abilities necessary to carry out their roles as certified nurse specialists in cancer nursing, and we believe that the results have met the purpose of this activity. This activity is considered to play an important role in helping graduates develop their roles as certified nurse specialists in cancer nursing in clinical settings, and is expected to be continued in the future.

Key words: certified nurse specialist in cancer nursing, case study meetings, support for research activities, social contribution

1）日本赤十字秋田看護大学　2）由利組合総合病院　3）秋田厚生医療センター　4）秋田赤十字病院
5）一宮研伸大学
1）Japan Red Cross Akita College of Nursing　2）Yuri Kumiai General Hospital
3）Akita Kousei Medical Center　4）Japanese Red Cross Akita Hospital　5）Ichinomiya Kenshin College

Ⅰ．序　文

専門看護師制度は、複雑で解決困難な看護問題を持つ個人、家族および集団に対して水準の高いケアを効率よく提供するため、特定の専門看護分野の知識・技術を深め、看護学の向上を図ることを目的として、日本看護協会が1994年度から開始した制度である(日本看護協会　2014)。

本学大学院の高度実践看護学専攻分野にはがん看護学と精神看護学の２つの専攻領域があり、いずれの専攻領域にも専門看護師教育課程が設けられている。専門看護師と認定されるためには、専門看護師教育課程を修了後、公益社団法人 日本看護協会が実施する専門看護師認定審査に合格しなければならないが、本学大学院がん看護学領域においては、2018年に修了生３名ががん看護専門看護師認定審査に合格している。また2020年度には、がん看護学領域及び精神看護領域において各１名が修了し、2021年の専門看護師認定審査に向けて準備を進めている。

大学院修了後、修了生は、所属施設から専門看護師としての役割を主体的に開発していくことが求められる。しかし、大学院を修了して間もない新人看護専門看護師が所属施設内で専門看護師としての信頼を獲得し、その役割を十分に発揮できるようになるまでには、大学院での学修だけでは困難を伴う場合が多い。若狭、野末(2012)は、新人専門看護師は実践の中で試行錯誤しながら実践活動を積み重ね、それを自分の中で整理し体系化していくことで初めて一人前の専門看護師として成長していくと述べており、そのための効果的なトレーニングとして定期的にスーパービジョンを受けることを挙げている。また宇佐美(2012)も、専門看護師を育成する上でスーパービジョンは大学院在学中のみに必要なものではなく、卒業後のほうがより重要であると述べている。スーパービジョンにはその領域の卓越者から指導を受ける場合と、同じ立場のものどうしがお互いの情緒的支援を共有しあうピア･スーパービジョンがあるが、どちらも並行して実施していくことでより高度な看護実践家としての力を高めることができるといわれている(宇佐美,2012)。このようなことから本学専門看護師教育課程の修了生が、所属施設において専門看護師としての十分な役割を発揮していくためには、大学院修了後も事例検討会や研修会などを通してその領域の卓越者や同じ立場の専門看護師からスーパービジョンを受けることが必要であり、大学としてその支援をしていくことは重要な課題である。

また、専門看護師の役割の一つに、専門知識及び技術の向上並びに開発を図るための実践の場における研究活動があり、専門看護師としての視点から、理論や実践と融合させたより質の高い研究を行うことが修了生には求められている。その研究に対する支援を行うことも大学の重要な役割と考える。

以上のことから、2018年度より修了生を対象にがん看護専門看護師事例検討会を開催することとなり、同時に研究支援活動も開始された。

加えて2021年度からは、修了生に対して本学における授業の非常勤講師やがん看護学実習での臨床指導を依頼し、修了生が後進の育成を通して社会貢献できるよう支援を行った。

本稿では、2018年度より始まった専門看護師教育課程修了後のがん看護専門看護師育成に向けた支援活動について報告する。

なお、この支援活動は「はばたけ秋田のCNS」というテーマで2020年度及び2021年度の学長裁量教育・事業活動促進助成による教育・事業活動支援事業として採択されたものである。CNSとは専門看護師Certified Nurse Specialistの略である。

Ⅱ．活動目的

本活動の目的は、専門看護師教育課程修了後のがん看護専門看護師候補生及び新人がん看護専門看護師に対し、がん看護専門看護師としての役割遂行に必要な能力向上のための支援をすることである。

Ⅲ．活動内容

本活動は、事例検討会の支援、研究活動の支援、社会貢献への支援から構成され、本学がん看護領域専門看護師教育課程の教員（以下教員）３名がその支援に携わっている。本稿ではこの３つの支援について各教員から報告する。

１．事例検討会の支援（赤木郁子）

事例検討会は、修了生ががん看護専門看護師認定審査を受けるにあたり、その支援として2018年度より開始となったものである。当時、本学がん看護学領域専門看護師教育課程において指導にあたっていた前任教授が中心となって発足され、2020年度より「はばたけ秋田のCNS」の活動の一環として継続されている。

事例検討会では、修了生が所属施設において携わった困難事例を提供し、その事例についての討議を修了生と教員間で行った。テーマによっては臨床の第一線で活躍している経験豊かながん看護専門看護師や、前任教授をスーパーバイザーとして招聘した。開催日程は概ね２か月に１回とし、修了生と教員が参加可能な18時30分から20時に開催した。開催方法は、発足当初、本学内にて対面で行っていたが、2020年度よりオンラインでの開催を試み、2021年度はほぼオンラインでの開催とした。

2020年度より始まった「はばたけ秋田のCNS」事業における事例検討会の日程及びテーマを表１に示す。

専門看護師には実践、相談、調整、倫理調整、教育、研究の６つの役割があるが(日本看護協会,2014)、事例提供者は専門看護師として携わった困難事例をこの６つの役割の視点で見直し、この役割に関するテーマで事例の分析を行った。内容の一例として、倫理調整事例では、患者、家族、医療者間で生じた倫理的葛藤に対する介入、調整事例では、退院時期の見極めが困難な終末期がん患者に対する介入、相談事例では、退職者が続く部署の運営に悩む管理者への介入、実践事例では、病棟看護師が難渋するスピリチュアルペインを抱えた終末期がん患者への介入などが挙げられる。修了生はこのような困難事例に対して、患者や病棟看護師、看護管理者、医師、家族など様々な立場の関係者の狭間で迷い、悩みながらも、解決に向けて真摯に向き合う過程を紹介していた。討議の中では、事例提供者である修了生の迷いや悩みに対し、共感や承認、時には異なる視座からの意見などが出され、活発なディスカッションがなされていた。また、教員からは俯瞰的視点からのスーパーバイズが加えられた。

更には2021年度の初めての試みとして、本学教員である医師の参加や、他大学のがん看護専門看護師事例検討会メンバーとの交流会を実施した。

２．研究活動の支援（新田純子）

専門看護師は、その教育課程を修了した後、学生役割から専門家としての専門看護師の役割に移行する。専門看護師としての役割は役割実践と呼ばれ、段階を通して役割を開発していく（Tracy & O'Grady, 2019/2020）。

2018年度に本学を修了したがん看護専門看護師３名も、その活動実績から、院内外での教育・研究・社会貢献活動を通して、所属施設から専門看護師として期待される役割を主体的に開発し獲得していることが推察できる。本稿では、実践の場における研究活動の支援について報告する。

修了生は、所属施設からの研究における指導的役割期待はもとより、自らも組織における実践の質向上に資する研究への希求が高まり、研究活動に取り組んでいる。この研究活動への支援は、本学高度実践看護学分野がん看護領域の前任教授の在任中に修了生から依頼があり、「はばたけ秋田のCNS」の活動の一環として継続しているものである。

修了生は、多忙な日々の業務の中で進捗の緩急を図りながら研究を継続しており、令和３年度は、対面とオンラインにより修了生が共同研究しているデータの分析を支援した。支援内容を表２に示す。

３．社会貢献への支援（糸川紅子）

2020年度は社会貢献と称し、修了生が専門看護師の６つの役割に含まれる研究について活動を支

表１　事例検討会の日程及びテーマ

日　時	テ　ー　マ
2020年４月３日（対面）	倫理調整役割に関する困難事例
2020年８月21日（対面）	相談役割に関する困難事例
2021年１月21日（オンライン）	倫理調整役割に関する困難事例
2021年４月13日（オンライン）	他大学がん看護専門看護師事例検討会メンバーとの交流会
2021年６月18日（オンライン）	調整役割に関する困難事例 本学教員の医師参加 他施設からスーパーバイザー招聘
2021年８月20日（オンライン）	実践役割に関する困難事例 他施設からスーパーバイザー招聘
2021年９月17日（対面）	調整役割に関する困難事例

援した。具体的には、コンサルテーションに関するテーマを掲げ、その成果について学会発表と誌上発表を行った。共同研究の第一歩は、修了生が報告したコンサルテーションの事例であった。事例にはコンサルタントがコンサルティとの関係性を構築するのに難渋した経過が示され、議論の結果、コンサルティのレディネスの査定に関する疑問が残った。驚いたことに、筆者はコンサルティのレディネスを査定する方略について、新たな研究の萌芽として捉えていたが、修了生は自己の能力不足や実践への懐疑として捉えていた。両者の捉え方の相違は「疑問を解決したい」という目標で一致し、表３に示す発表へと発展した。

2021年度は2020年度に取り組んだ研究を踏まえ、研究科コンサルテーション論の講義・演習におけるゲストスピーカーとして修了生を招聘した。講義では専門看護師が内部コンサルタントとなり､医師をコンサルティとするコンサルテーションの実際について説明された。講義内容にはコンサルタントの心情やコンサルティの変化など、リアルな情報がふんだんに盛り込まれていた。演習では大学院生がコンサルタントとコンサルティを体験する模擬コンサルテーションを実施し、修了生が観察者役を担った。大学院生はコンサルテーションを体験し、修了生から実践的な意見を得ながら講義での学びを深める機会を得た。本学の大学院生はほとんどが社会人学生であるため、日頃から現場で直面する課題に照らし合わせながら学びを深めていた。講義や演習に臨床で活躍する修了生が参画することにより、明日への一歩に繋がる知識を得られたという感想を述べていた。

Ⅳ．修了生の活動に対する報告

2018年にがん看護専門看護師として認定された修了生３名は、現在、各所属施設においてがん看護専門看護師として活動している。本稿ではこの３名の修了生から寄せられた本活動に対する報告を示す。

１．2017年度修了生（打矢和子）

私は大学院生の頃より、がん相談支援センターの兼任看護師となり、修了と同時に専従看護師として勤務している。日々、がん患者・家族だけでなく、院内外の医療・福祉従事者からの相談を受けやすい立場であり、相談者の真のニーズを明確

表２　研究支援の日程及び内容

日　時	研究支援の内容
2021年４月28日 18:30～20:30 （オンライン）	・グラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）の理論的基盤、プロセスの図式化について ・データの読み込み、データの切片化について ・データの分析：読み込みと切片化
2021年６月９日 18:30～20:30 （対面）	・プロパティとディメンションの役割について ・変化のパターンの把握について ・データの分析：プロパティとディメンションの抽出
2021年９月21日 18:30～20:30 （対面）	・理論化を進めやすくなる「メモ」について ・現象ごとのパラダイムについて ・カテゴリー関連図について ・データの分析：プロパティとディメンションを使ってカテゴリー同士の結びつけ

表３　共同研究における取り組み

学会発表	
第35回日本がん看護学会 学術集会 （2021年２月）	交流集会12：SIG協賛企画 「コンサルティとの関係づくりについて考えよう」
誌上発表	
日本赤十字秋田看護大学・ 日本赤十字秋田短期大学 紀要第25号	専門看護師によるコンサルテーションにおける課題の明確化と共有に関する文献検討

にできるよう語りを促進し、相談者を最大限尊重し、共に考える姿勢を大切にした専門看護師を目指し活動している。

しかし、私は組織初の専門看護師であったこともあり、日々専門看護師としての役割をどう意識してどう遂行していくのか、自分自身の関わりやケアに至った思考と実践をどう振り返り、整理するべきか悩むことが多かった。

そんな中、修了校での定期的な事例検討会は、未熟な私にとっていつでも相談できる大切な場となっている。また、専門看護師としての活動を振り返り、文章化する事例提供は、問題の抽出やケアの方向性などに迷い、悩んだ事柄について向き合う必要不可欠な機会でもある。さらに、私にとって事例検討会は、大学院修了生からのピアサポートや大学院教員よりスーパーバイズが受けられ、異なる視座や方略を学び直す貴重な機会であると同時に、心理的サポートも受けられている。ならびに、他の専門看護師の事例の客観的検討や間接体験の蓄積は、今後の役割開発のヒントにつながっている。

その他、私に大学院でのゲストスピーカー担当の提案をいただき、事例を通したコンサルテーション論の講義内容に迷った際にも大学院教員よりきめ細やかな支援や指導が受けられ、大学院生教育の一端を学び、臨床現場での看護師教育に活かせる示唆が得られた。

現在、私は修了生３名共同で「AYA世代がん患者・家族に関わる看護師の体験の構造とプロセス」というテーマで初めての質的研究（グラウンデッド・セオリー・アプローチ）に取り組んでいる。しかし、修了生３名だけではグラウンデッド・セオリー・アプローチは難しく、行き詰まり、悩みが尽きなかった。そこで大学院教員に相談したところ、グラウンデッド・セオリー・アプローチの解釈が深まるような資料提供や講義を含め、私たちの状況に合わせた丁寧な研究支援が受けられている。これらの恩恵により少しずつ研究が進められ、研究の学びが深まり、組織でも専門看護師として看護研究支援に還元できている。

私にとって、大学院修了後も大学院教員より継続的に温かい支援が受けられていることが、専門看護師能力向上を目指し自己研鑽を積み重ねるモチベーション維持に結び付いている。

２．2017年度修了生（小川雅子）

私は専門看護師候補生の頃より病棟に所属し活動を行っている。病棟では、日常にある倫理課題や、治療方針、療養場所の意思決定においてニーズを捉え本人の善行となるよう活動し、専門看護師が身近に相談でき協働できる存在となるよう務めている。また、組織や看護師からのコンサルテーション、看護外来、教育ラダー研修などの役割を担っている。

事例検討会発足時には、方略や調整内容を明確化できずに悩んでいたが、その都度、専門看護師としての視点を培うスーパーバイズを頂いた。時には事例の順番を早めて頂き、タイムリーに実践を紐解くことで、自身の思考の整理や異なる視点で捉えるきっかけともなり、現場への還元に繋がっていた。事例検討会を重ねるごとに、全体を俯瞰して捉える視点を学び、専門看護師としての成長に繋がっていると感じている。時には現場の速さから、自身の思考の混乱を払拭できずに至らなさを痛感する場合にも、思いを受け止め、率直な意見を頂き、時には自身の気づかない部分をも認めて頂いた。思わず胸のすく思いに助けられ、示唆に富んだ学びや励ましは、次なる行動へのステップへと繋がっている。また、組織コンサルテーションにおけるスーパーバイズでは、言葉の用い方一つが自身の捉えを変えるきっかけとなり、組織活動を行う上で忘れえない体験となっている。また、自施設初の専門看護師であったことから、同期お二人の刺激は大きく、互いの立ち位置の違いが様々な視点を培うカギとなり、現状や活動報告では自施設への様々なヒントが得られている。仲間に恵まれ、ありのままを受け入れ、信じ合える関係性が専門看護師としての互いのコーチングに繋がっていると考える。

大学院講師依頼では、コンサルテーション論のゲストスピーカーとして、コミュニケーションスキルの活用やコンサルタントに求められる能力や姿勢など、協働問題解決者としての日頃の実践をお伝えする機会を得た。また、このような新しい授業への参加により、自身の担当するラダー教育に参加型学習を取り入れる際の参考ともなり、新たなチャレンジへと繋げられた。

研究支援では、質的分析の基礎となる知識や技法を学びながら共同し分析を進めることができ、貴重な機会となっている。大学院終了後も大学との様々な連携をもてるこの環境に感謝しながら、専門看護師としての役割開発を行い、組織、地域へと貢献し続けたい。

３．2017年度修了生（川原明子）

高度実践看護師教育課程を修了後、継続的に事例検討会に参加している。現在、がん相談支援センターに勤務し、患者家族、地域住民よりがんに関する相談を受けている。相談者の価値や信念を知り、相談者が自ら選択できるような情報提供や意思決定支援を行っている。“がんと共に自分らしく生きるを支える看護”を大切にしており、専門看護師としては倫理調整、相談、教育の役割を担うことが多い。

事例検討会へ参加して：専門看護師として依頼を受ける内容は、解決困難で複雑な課題であることが多い。関わる人々のナラティヴを大切にし、課題となっている現象を俯瞰的な視点でとらえ、方略を見出しているが悩むこともまた多い。事例検討会で教員、専門看護師、専門看護師候補生から理論や知識の活用、管理の視点など様々な意見をもらい、解決の糸口を見つけたり内省したり組織変革に向けた方略を検討することができている。また、事例検討会は、自身の抱える課題や悩みを相談しても攻撃を受けない場と認識している。緊張感を保ちながらも安心して話すことができ支えとなっており、継続的参加の一因である。

専門看護師候補生の実習指導者を担って：実習生が主体的に学びやすいように実習環境を整備し、実習生が専門看護師としての視点で現象をとらえ役割を遂行できるような支援を心がけた。実習生と共に学ぶ機会を得られ、自身の学び直しの機会にもなった。

研究支援を受けて：専門看護師は、専門知識及び技術の向上並びに開発を図るために実践の場で研究活動を行う役割がある。大学院で学んだ知識を土台に研究に取り組んでいる。様々な研究方法がある中で、研究課題を明らかにするために最適な分析方法を選択するためのアドバイスを受けた。また、質的研究の分析において、教員からスーパーバイズを受けることで信頼性と妥当性の担保に繋がっている。さらに、所属組織からは研究支援への参画が求められており、教員からの支援により組織に還元することにもつながっている。

以上の様に、教員からの継続的な支援により、自身の抱える課題の気づきを得たり、理解を深めたりしながら専門看護師が備えるべき高度看護実践能力の修得や役割遂行のために必要な能力の向上につながっている。

Ⅴ．考　察

１．活動の意義

本活動は事例検討会の支援、研究活動の支援、社会貢献への支援の３つの支援から構成され、修了生はこの３つの支援を通して、がん看護専門看護師として備えるべき高度看護実践能力の修得や、役割遂行のために必要な能力の向上がみられたと報告している。本稿では各支援の意義について考察する。

１）事例検討会の支援

日本の専門看護師が役割を獲得するまでの内的成長プロセスにおいて、新人専門看護師は役割認識の中で悩み、焦燥感や葛藤を抱いていることが明らかになっている（田中,2015）。修了生も専門看護師と認定された当初は「専門看護師としての役割をどう意識し、どう遂行していくのか悩むことが多かった」と述べており、このプロセスの途上にあったと考える。田中（2015）によると、この時期に支えとなっていたのはピアサポートであり、新人専門看護師は、大学院の同級生からのピアサポートなど周囲に支えられながら、自身をかえりみる作業を繰り返し、やがて役割感覚を得るようになると報告している。修了生は本活動における事例検討会について「いつでも相談できる大切な場」や「攻撃を受けない場」であると述べており、同級生である専門看護師からのピアサポートが修了生の心理的な支援となっていたことが伺える。以上のことから、特に新人専門看護師の段階においてはピアサポートが重要であり、本活動の事例検討会のようにピアサポートが受けられるような環境を整えることが、専門看護師を育成していくための支援として今後も求められていると考える。

一方、専門看護師の質の保証のためには、その活動の評価が欠かせない。しかし、いかに評価をするかについては困難な作業といわれている（佐藤,1999）。なぜなら専門看護師は、患者のケアの向上、スタッフの能力の向上、そして施設の機能の向上のために直接ケアとコンサルテーション、教育、研究、調整を行っており、その役割は多様で、各領域での結果が評価に含まれなければならないからである(アンダーウッド,2003)。そのため、非常に複雑である専門看護師の実践の評価につ

いては、専門看護師の同僚同士で評価するか、あるいは自己評価とするかのいずれかが適当であるとされている（佐藤,1999）。しかし、実際には実践の中で自己評価を行う時間を確保できないことが多く（佐藤,1999）、また修了生のように所属施設に１名の専門看護師しか存在しない場合には、同僚の専門看護師から評価を得ることは困難となる。そのため、本活動における事例検討会の中で、自身の実践を他の専門看護師と共に振り返ることは、専門看護師としての客観的な評価を得ることにつながる。評価は役割実践を高めるための基本であり（Mary & Eileen, 2020 中村・江川監訳 2020）、事例検討会での他の専門看護師による客観的評価が専門看護師の質の保証につながるものとなる。以上のことから本活動における事例検討会は、修了生の専門看護師としての質の保証をしていく上でも重要な役割を果たしていると考える。

また、修了生は事例検討会を「思考の整理や異なる視点で捉えるきっかけ」と位置づけ、「事例検討会を重ねるごとに、全体を俯瞰して捉える視点を学び、専門看護師としての成長に繋がっている」と述べていた。更には、事例を分析する過程が「組織変革に向けた方略を検討する」ことに発展することもあった。がん看護専門看護師が対象とする複雑で解決困難な事例に携わるためには、より専門的で緻密な知識と深い洞察力が必要であり、できる限り多くの事例を受け持ち、修了生や教員などを交え、事例の振り返りを通して幅広い視点からの洞察力を深めていくことが必要であるといわれている。（林田,田中,吉田,山口,2013）。

そのため今後も事例検討会において、修了生が事例の振り返りの中で専門看護師としての視点を広げ、役割拡大につなげていくことができるよう支援を継続していくことが重要であると考える。

２）研究活動の支援

専門看護師の役割には、臨床の場における研究活動があり、現在、修了生３名で協働して質的研究に取り組んでいる。本学在学中からも実践や理論と研究の結びつきについて理解を深めていた修了生であるが、質的研究に取り組む機会には恵まれなかった。特に今回、修了生が取り組んでいるグラウンデッド・セオリー・アプローチは、書籍だけで修得することが困難であり（戈木,2016）、修了生の希求によって、教員の支援が開始されるようになったものである。専門看護師としての視点から、理論や実践と融合させたより質の高い研究を行うことができるよう修了生を支援することも本活動の重要な役割であると考える。

加えて修了生は自身の研究活動のみならず、所属施設からの研究支援への参画が求められていると述べており、本活動の研究支援は、修了生が所属施設において研究指導の役割を果たすことにもつながる支援になると考える。

３）社会貢献への支援

社会貢献への支援に関して修了生の報告から明らかになったことは、修了生が本学の授業のゲストスピーカーや実習指導者としての役割を担ったことが、修了生自身のリフレクションとなり、所属施設における看護師教育に対する示唆へとつながっていたということである。専門看護師の役割のひとつである教育役割は、修了生の所属施設からも希求されていた役割であり、本活動がその役割開発に寄与できたと考える。

一方、本学の学生にとっても、臨床の第一線で活躍する修了生の言葉は、より実践的で説得力のある言葉として届き、学びの深まりへとつながっていった。臨床に身を置く修了生だからこそ伝えられる看護があると考える。今後も看護教育において、このような大学と修了生との協働は欠かせないものである。

２．事例検討会及び研究支援におけるオンラインの活用

事例検討会は発足当初、修了生が本学に集合し、対面で開催されてきた。しかし2020年８月以降は、新型コロナウイルス感染症の全国的な感染拡大に伴い、修了生によっては所属施設外の他施設への訪問に制限が設けられるようになった。そのため対面での開催が困難となり、事例検討会は余儀なく一時中断となった。しかし2021年１月よりオンラインでの開催に切り替えることによって、活動の継続が可能となり、対面による感染を懸念していた修了生も安全かつ安心して事例検討会に参加

できるようになった。

また、これまで移動に伴う負担が大きく、頻回の参加が困難であった県外在住の専門看護師の参加も、オンラインの活用によって容易になったため、今後は県外で活躍する専門看護師を招聘することによって、より質の高い事例検討会が可能になると考えられる。

研究活動支援に関してもオンラインでの支援が可能になったことで、新型コロナウイルス感染症感染拡大状況下にあっても、教員からの指導を受けることが可能となった。

しかし研究の内容によってはオンラインよりも対面による指導の方が、より効果が期待できる場合も考えられるため、状況や目的に合わせてオンラインと対面とを使い分けることが必要である。

Ⅵ．今後の方針と展望

今後、事例検討会においては、テーマによって医師の参加を依頼していく方針である。2021年度の事例検討会に本学教員である医師が参加した際、医師の視点からの臨床判断や示唆に富んだ意見を得ることができ、事例の理解を深めることにつながった。専門看護師には、ケアとキュアを融合した高度な看護実践能力が求められており、医師の臨床判断からも学びを得ながら常に臨床判断能力を磨いていく必要がある。また臨床では、医師と協働して困難事例に対応する場合や、医師へのコンサルテーションを行う場合もあり、医師との相互理解が欠かせない。そのため事例検討を通して互いの立場を理解しあえる場は貴重な機会であると考える。

また現在の活動は、本学の修了生と教員間で行われている活動が中心となっているが、今後、他領域や他大学との交流によって、この活動をより発展的に継続させていくことが可能になると考える。本学には精神看護領域にも専門看護師教育課程が設けられており、本学精神看護領域の専門看護師教育課程を修了した精神看護専門看護師との交流も可能である。また同じ市内にある他大学でも、がん看護専門看護師事例検討会が開催されており、2021年度はこの大学の事例検討会メンバー(がん看護専門看護師と大学教員)との交流会を実現することができた。このような他領域、他大学との交流を支援することは、修了生にとって専門看護師としての視野の拡大や新たな知見の獲得につながるであろう。

加えて、専門看護師には専門看護師の質の保持のため５年ごとに更新審査があり、看護実績、研修実績及び研究実績についての審査が実施されるが、本活動での支援は専門看護師としての質の保持につながり、更新審査を受ける上でも有効であると考える。

利益相反

本報告において利益相反に該当する事項はない。

引用文献

林田裕美, 田中京子, 吉田智美, 山口亜希子（2013）. がん看護専門看護師が実践を行う際に必要な能力―がん看護専門看護師教育課程担当教員とがん看護専門看護師の立場から―. 大阪府立大学看護学部紀要, 19（1）, 41-51.

パトリシア・R・アンダーウッド（2003）. 専門看護師の導入に向けて―組織の準備,役割開発とその評価. パトリシア・R・アンダーウッド論文集看護理論の臨床活用（pp.248-258）. 日本看護協会出版会.

戈木クレイグヒル滋子（2016）. グラウンデッド・セオリー・アプローチ　改訂版 理論を生みだすまで（p.13）. 新曜社.

佐藤直子（1999）. 専門看護制度―理論と実践（p.146）. 医学書院.

日本看護協会.（2014）専門看護師・認定看護師・認定看護管理者https://nintei.nurse.or.jp/nursing/qualification/cns　2021年9月17日.

田中久美子（2015）. 日本の専門看護師が役割を獲得するまでの内面的成長プロセス.日本看護研究学会雑誌, 38（1）, 127-137.

Tracy,M.F., & O'Grady, E.T.（2019）/中村美鈴, 江川幸二（訳）（2020）. 高度実践看護総合的アプローチ 第２版（pp.98-105）. へるす出版.

宇佐美しおり（2012）. 高度看護実践家の臨床能力発達と育成. 宇佐美しおり,野末聖香（編）, 精神看護スペシャリストに必要な理論と技法（pp.318-325）. 日本看護協会出版会.

臼井いずみ,中村伸枝,松田直正,荒木暁子,市原真穂,奥朋子,添田百合子,細谷美紀,松岡真里（2011）. 専門看護師・専門看護師教育課程修了者および看護管理者の専門看護師教育課程へのニーズ. 千葉看護学会誌, 17（1）, 35-42.

若狭紅子,野末聖香（2012）. 認定制度と大学院教育の

概要. 野末聖香（編）， リエゾン精神看護―患者ケアとナース支援のために―（pp.301-309）. 医歯薬出版.